Title	人間福祉総論という講義
Author(s)	大木，英夫
Citation	聖学院大学論叢, 11(4), 2000.2 : 251-257
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=557
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

人間福祉総論という講義

大　木　英　夫

Basic Idea of Human Welfare
—— The Fall Semester Opening Lecture ——

Hideo ŌKI

The unique ideal of the Department of Human Welfare at Seigakuin University is an emphasis on the "human" factors in social welfare. This stands on two bases: one is the Christian spirit and the other the New Democratic Constitution. On the one hand, we are heirs to a long tradition of Christian Social Work. On the other, we take the Constitution seriously.

We take the ancient dictum, *"Salus Populi Suprema Lex,"* (The People's welfare is the supreme law) as the motto of Human Welfare at Seigakuin University. Social workers should not be "specialists *without* spirit," (Max Weber), but "specialists *with* spirit." Seigakuin resists every "dehumanizing" trend. We educate Seigakuin students in the direction of "humanization." We emphasize that social welfare workers are the ones to realize the ideals of the New Constitution (rich nation and just welfare) over against the previous model in which soldiers were to realize the ideals of the Old Constitution (rich nation and strong militia).

ま　え　が　き

「人間福祉総論」という講義は，聖学院大学人文学部人間福祉学科のカリキュラムの中では特別の位置をもっている。それは，この学科の設置にあたって構想された理念によって指定されたものであり，聖学院大学における人間福祉学の特質を明らかにすることによって，学生をそこへと導くためのオリエンテーションである。今年度の学生はその第一期生であり，この第一期生のオリエンテーションは，今後本学に入学するであろう学生全体のためのオリエンテーションとなるはずであるから，いわばこの学科の基礎づくりを意味するものである。それは，社会福祉学概論と呼ばれるものではない。それはその方面の専門の教授によってなされることになっている。人間福祉総論は

Key words; Human Welfare, New Constitution, Specialists with Spirit, Dehumanization, *Salus Populi Suprema Lex*

それに屋上屋を重ねるようなものではなく，「聖学院大学における」人間福祉学科の位置と意義を明らかにすることを目指している。そのようなものとして，他に存在しない聖学院大学人間福祉学科独特な講義であり，独特に構想されたものである。

この人間福祉総論の講義にあたって留意したことは，何よりもまず文部省に提出した人間福祉学科設置の趣旨の基づいて，その趣旨を学生の理解へともたらすという教育的課題であり，内容的には聖学院大学の人間福祉の思想を日本国憲法とキリスト教倫理学とによって基礎づけるということであった。そのようにして「福祉」を，単に精神論でもまた単に技術論でもなく，さらに比較的最近まで日本の社会福祉論を特徴づけたマルクス主義的オリエンテーションとも異なり，福祉の課題を，世界史的社会変動の文脈において，日本国憲法に基づく新しい日本の国家目標として位置づけ，それを担う働き人に求められる人間の形成をも明らかにすることとした。

ここに掲載されるものは，大学アドミッション・センターからの依頼によって，人間福祉学科の全学生約120名と見学に来た県下鴻巣高校の教師と生徒約60名のために公開された講義である。聖学院広報センターによってテープにとられ，それを起こし講義録として，聖学院広報センターから出された印刷物『ヴェリタス』に発表された。それに多少手を加えた上での転載である。

これは研究論文ではない。これが学生向けの講義であることから，そのための諸準備は背景に隠れていてあらわに出てはいないし，引用や注記をすることはしていない。しかし，すべての講義は，背後にある研究と無関係ではない。大学においては研究と教育とが結びついていなければならない。その研究の成果は学生に向けて語られねばならない。この背後にあるものについては，拙著『新しい共同体の倫理学』上（1985），下（1986）を参照して頂ければ幸いである。

これは，たまたま1998年の後期最初（10月７日）の講義であったので，前期の講義の基本線を要約的に示したところがある。この最初の学科の論文集にむしろこのような形で「人間福祉総論」の講義の一端を残すことは，ふつう論文集にはないことであろうが，「人間福祉学」なるものが形成途上であることからすれば，許されないことではないであろう。たとい，これから多くの教師や学生たちによって長期にわたりなされるであろう聖学院大学の人間福祉学科の大建築のためのいわば「定礎」の石版ほどの役割であるかも知れないとしても，無意味ではないであろう。将来のためいささか貢献するところがあればさいわいと願って，これを寄稿することとした。(1998.12.8.)

「人間福祉学科のめざすもの」

Ⅰ．国家の基礎構造（Constitution=憲法）のパラダイム・チェインジ

まず第一に，人間福祉とは，日本国憲法の規定する新しい国家目標に関わるものである，ということについて話したいと思います。みなさんは，パラダイム・チェインジ（paradigm change）という言葉を聞いたことがあると思います。聞いたことがなければ，きょうそれを覚えていただきた

い。「パラダイム」という言葉は，辞書によれば，「一時代の支配的な物の見方。特に，科学上の問題を取り扱う前提となるべき，時代に共通の体系的な想定。天動説や地動説。クーンに始まる用語」と記されてあります。パラダイム・チェインジとは，典型的なたとえで言えば，天動説から地動説への転換だと言ってよいでしょう。天動説では，地球が動かないで，太陽が動くと考えられていました。それは一見そう見えることに基づいて，長い間人間の考え方を規定してきた世界観でした。ところが，地動説が現れて，いや地球の方が動いて，太陽のまわりを回っているのだ，と言い出したのであります。世界や宇宙の見方，いや，人生観までがひっくりがえるのであります。コペルニクスが書いた『天体の回転について』という題の「回転」という言葉は，ラテン語では re-volutio ですが，それはやがて「革命」(revolution) を意味するものとなりました。

そのようなことがパラダイム・チェインジですが，それは宇宙の見方だけでなく，国家の構造，憲法は英語では Constitution（基礎構造）ですが，その仕組みにも起こってくるのです。つまり「革命」的な変化であります。かつての大日本帝国憲法で規定されていた国家構造は，天皇が上で，下々の人民は下，そういう上下の秩序関係でした。それは父と子とのアナロジーであったわけです。そのような国家構想のことを専門用語で言えば「父権主義」(paternalism) と言います。Pater とはラテン語で父を意味します。そこにおける上下関係は，子どもがどんなに努力しても父の年齢を超えることができないような，どうしても逆転できない秩序であります。パターナリズムは，また，「温情主義」とも訳されています。上に立つ者が温情をもって，下の者の面倒を見る，世話してあげるという態度であります。これが大日本帝国憲法のパラダイムであったのです。

ところが，戦後制定された日本国憲法によれば，それは日本国憲法の前文に出ておりますが，こう規定されています。「そもそも国政は，国民の厳粛な信託によるものであって，その権威は国民に由来し，その権力は国民の代表者がこれを行使し，その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり，この憲法は，かかる原理に基づくものである。われらは，これに反する一切の憲法，法令及び詔勅を排除する」。ここに出てくる「国民主権」という原理は，古い大日本帝国憲法の天皇絶対主義と比べると，国家構造における典型的なパラダイム・チェインジを表していることが分かるのであります。

人民の福祉が国家目標

"Salus populi suprema lex" =「人民の福祉が最高の法」ということ，それが政治の究極目標だということを前期にも話しました。これは古いローマ帝国時代のストア派の思想であるが，それが，この契約思想による国家理論のパラダイム・チェインジにおいて，きわめて有効に再生されてきました。サルス・ポプリとは，英語では，people's welfare，人民の福祉ということであります。

前期は，日本国憲法の規定との関係で，新しい日本は「福祉社会」の形成が国家目標となるということを話しました。古い大日本帝国憲法から新しい日本国憲法へという変化は，国家構造 (constitution) におけるパラダイム・チェインジだと言ってよいのです。

上に引用した日本国憲法の前文に出てくる「福利」という言葉は，英語では benefits です。「信託」trust は，契約と同義語と言ってよい。契約を理解するとき，信託という言葉をもって理解するのがよいのです。なぜなら，契約とは，決して不信ではできないものです。信託，それは福利を求めるのです。お金を預かってもらう，それを「ねこばば」――悪行を隠す，自分のものにするという意味ですが――されるのでは困る，default 契約不履行，払えなくなる，それでは困るわけです。国民主権の原則，信託の思想はかならず福祉国家を要求することになるのです。それは，憲法の前文の「国民主権」の規定，契約の思想から必然的に由来するものであります。主権者である国民の契約，それは何のためか，それは，自分に害を与えるような契約はしない。益，幸福を目的としているのであります。だから，政府を契約によって立てるのは，人民に益をもたらすためでなければならないのです。リンカーンの有名な言葉を借りて言えば，「人民による，人民のための，人民の政治」でなければならないのであります。

Ⅱ.「人間福祉」とは何か――「福祉人」について

人間福祉学科のみなさんは，この新しい憲法の国家目標に直接に奉仕する働き人となって行くのであります。大日本帝国憲法の体制に直接奉仕したのは，軍人や役人でした。しかし，日本国憲法の理想に奉仕するのは，どういう人間でなければならないか，それが問題です。この学科の設置のため造られた設置趣意書には，「福祉人」という言葉が用いられました。

「福祉人」とは聞きなれない言葉です。そういう言葉がこれまで日本社会にはありませんでした。そういう「人」がいなかった，いや，いないことはなかったが，ごく少数であったのです。

わたしは，パラダイム・チェインジは，まず人間の中に実現するのでなければならないと思います。国家だけでなく，人間もパラダイム・チェインジが必要なのであります。それが「福祉人」ということです。

大江健三郎は，ノーベル賞受賞講演で，新しい日本人のために，a man of decency ということを理想としました。上品さ，みだしなみのある日本人。それは聖学院大学の教育のひとつの理想でもあります。粗野であってはならない。戦争中，日本人は，突如豹変して残虐になると，世界のひんしゅくをかったのであります。それではいけないということを大江氏は言っているのだと思います。

それに類似した a man of character（有徳な人）とか，a man of his word（言行一致の人）のような言い方を借りれば，a man of welfare「福祉人」とは，「福祉に生きる人」であります。福祉で生きるのではなく，福祉に生きる人であります。福祉社会の実現が国家の役割，そのような役割を担う国家が福祉国家，しかし，その人間的基盤として，「福祉人」が出てこなければならないのです。「福祉人」とは，福祉社会，福祉文化，福祉国家の，人間的基礎であります。

よい福祉には，何か熱く燃えるものものが心の中になければ，それをやり遂げることはできませ

ん。福祉には，「福祉に夢中になる」というようなことが必要なのであります。「夢」中，それはたしかにかたわらから見ると，「夢」の中に生きているように見えるかも知れません。しかし，その「夢」に生きる，「夢」を見ていない人は，パラダイム・チェインジを経ていないのではないしょうか。パラダイム・チェインジをしていないような考え方や見方を拒否するのです。パラダイム・チェインジを経験している，それが聖学院大学の教育であります。地動説の中に生きる，それはいまでも天動説に生きている人には，夢みたいな話しとなるでしょう。しかし，聖学院大学の学生とくに人間福祉の学生は「夢」に生きるのです。福祉に夢中になる，そういう人間こそ，福祉に生きる人間であります。そういう人間こそ，新しい日本，福祉日本をつくる人なのであります。日本国憲法の規定する新しい日本の国家目標の実現には，このように福祉に夢中になる若者を必要としているのです。そういう精神をもっている福祉の専門人を必要としているのです。

Ⅲ.「精神ある専門人」

近代日本，特に戦後の日本は，科学技術の面で大きな発展をしてまいりました。マックス・ヴェーバーは，近代の合理化の進行の果てに出現する「精神なき専門人」ということを予言しました。今日の日本を見ると，まさにその予言は的中しました。

もちろん福祉には技術は必要です。その技術を人間福祉学科のみなさんは卒業まで習得しなければなりません。しかし，聖学院大学の人間福祉学科が願っていることは，「精神なき専門人」ではなく，「精神ある専門人」であることであります。戦後の日本では，精神主義ということは批判されてきました。しかし，それは戦争中や戦前の日本の誤った精神主義については妥当しますが，「赤子を湯水といっしょに棄てる」愚かさに陥ったこともまた否定できないのであります。今日の精神の荒廃は，戦後日本の外面の復興のあとなお残ったままなのであります。最近は，文部省は「こころの教育」を言い出しました。

みなさんの中には，おじいさんやおばあさんと一緒に暮らしている人もいるかと思いますが，老人介護は大変な仕事であります。虐待も起こります。「精神なき」福祉専門人は，ヴェーバーが「暗い北極の夜」の到来を予感しましたが，その予感が当たるような悲惨な社会を産み出すのではないかと恐れるのです。

Ⅳ. 福祉の「ミニスター」

憲法第二十五条には，「国家には社会福祉の義務がある」ということが規定されています。ここにもパラダイム・チェインジのありさまが出ているのですが，この国家目標に仕える人間は，古い精神をもった公務員であってはならないはずです。公務員は公僕でなければならないと言われますが，それができていないのです。最近「サービスを提供する」という変な言葉が用いられています。国家が温情をもって弱者に「福祉」をしてあげるというパターナリズムではなく，国家は国民主権

によって立てられた機関であり，国民の税金によって運営されるわけですから，昔のようにパターナリズムで，福祉をしてあげるというのであってはならないのであります。「サービスを提供する」というのは，パターナリズムの変形です。パラダイム・チェインジを果たしていないまま，つまり古い官僚的人間のままでは，新しい国家目標の達成はできないのです。あたかも逆立ちしてものを見る，逆立ちして歩くようなものです。古い精神をもったまま，官僚と結託したシルバー産業のようになる，それは福祉社会の実現を不可能にするのであります。

ミニスター，英語で首相はプライム・ミニスターですが，それはキリスト教の牧師をミニスターというのと同じなのです。本来は「奉仕者」を意味します。日本は，相変わらず大臣，総理大臣と言って平気でいます。それも古い大日本帝国憲法の残影です。天皇の家来ではない，国民への奉仕者でなければならないのです。国民の福祉のためのミニスターでなければならないのであります。福祉人はミニスターでなければならないのです。官僚のエリート・コースをのぼることに生き甲斐を感じたり，上に立つものとなって威張るのでもなく，喜びをもって人びとに仕えるミニスターになるのです。聖学院大学の卒業生は，そのようなミニスターになって行って頂きたいのです。

V.「富国強兵」から「富国福祉」へ——新しい国家目標

今まで申し上げてきたようなことを実現して達成すべき日本の新しい国家目標は何でしょうか。わたしは，新しい国家目標としての「富国福祉」ということを提唱しています。これは言うまでもなく，大日本帝国憲法のもとでの古い国家目標「富国強兵」に対するものです。日本国憲法の前文には「日本国民は恒久の平和を念願し」ということが言われています。1945年の敗戦によって古い国家目標は破滅しました。しかし，それから日本の目標は，「強兵」を棄てて，ただ「富国」だけにし，それを国家目標としました。その結果目標のない豊かな国ができました。それが広範囲にわたる腐敗堕落となって現れ出しました。腐敗した繁栄の中で若者たちは生きる目的を失っています。それは日本国家が国家目標をはっきりしなくなったからです。今日の日本には空虚感や閉塞感がみなぎっています。それはどこからきたか，学生諸君はよく見抜かねばならないのであります。

日本国憲法は，国家の目標を定めています。それをわたしは，「富国福祉」と言いなおしてみたいのです。国を豊かにすることは大切です。しかし，それは「人民の福祉」のためです。「人民の福祉が最高の法」なのです。デモクラシーは，リンカーンの言う人民の政治ですが，それは人民による政治であるだけでなく，人民のための政治でなければならないのです。聖学院大学の人間福祉学科は，憲法の定める福祉社会の形成者の養成をするところです。日本の新しい社会は，福祉社会でなければならないのです。福祉人が，その人間的基盤でなければならないのです。福祉人は，国家目標のためのエリートとなるのです。選ばれた人，新しいエリートであります。思想と理想がなければならないのです。福祉人は，新しい国家目標のための働き人なのであります。

Ⅵ. おわりに

みなさんは堀辰雄という作家の名前を知っているでしょう。この人の奥さんは，女子聖学院の卒業生です。彼のものでよく読まれたひとつは『風たちぬ』です。その冒頭に彼はヴェルレーヌの一節を引用し「風たちぬ　いざ　生きめやも」という詩をかきました。今日は後期の最初の日です。この詩は初秋の感覚でしょう。人はなんだかわからないものに人生をかけることはできません。このために生きるというものがなければならないのです。「いざ　生きめやも」――この新しい秋学期，みなさんにとって聖学院大学での最初の年の後期，その一日一日を，生き甲斐を求めてみなさんには進んで行っていただきたいと願っています。(1997年10月７日)